

「管理栄養士がチームに入ることは、一歩前の予防医療に取り組みることにつながります。生きることをみてくれている、支援している、そんな感覚です。栄養士の観点で持ち帰ってきた生活背景やADLを、私たち薬剤師が薬学の観点に置き換えて考える。多角的に患者と向き合うことにつながっているんです」。予防医療は薬局



Interview with  
Kayoko  
Oguro

## 地域に根ざす 真の薬剤師を目指して

[後編]

薬局は処方箋の対応を中心とした量的な整備から、「かかりつけ」として機能の充実・強化を図ることが求められるなか、薬剤師には、医療の一旦を支える存在として、人に寄り添う役割がある。群馬県高崎市に拠点を置く株式会社ファーマ・プラスが目指すのは、地域に根ざした健康拠点として、在宅医療や多職種連携に取り組む、本当の意味での薬局だ。

前編では、あらたな拠点に貫通する薬局としての理念、在宅医療における薬剤師の役割について伺った。後編では多職種連携の取り組みについて同社の小黒佳代子氏に伺う。

### 小黒 佳代子氏

株式会社ファーマ・プラス  
専務取締役  
プラス薬局薬剤師

#### PROFILE

一般社団法人 日本在宅薬学会 評議員  
一般社団法人 日本褥瘡学会 評議員



### 密なコミュニケーションを 大切にする

多職種連携が不可欠な在宅の現場で、小黒氏が常に意識して、実践してきたことがある。それは、医療チーム間で密にコミュニケーションをとる、ということだ。一見あたりまえのように聞こえるかもしれないが、過密なスケジュールになる現場では、情報交換や連携が疎かになることで、チームがまとまらない、という類の問題を抱えるケースは少なくないだろう。結果、患者にとってマイナスの環境を生む可能性は大いに高まる。そのことを想像すると、小黒氏が力説する「コミュニケーションの大切さ」が、在宅医療においてもっとも大切なポイントとなるのは自明であると気づかされる。

薬剤師が、医師と看護師の関係性の中に踏み込んでいくためにまずは始めるべきは何か。「あの薬剤師に」と思い出し、もたらうには、何が必要か。小黒氏は、いかに信頼を得て、意見を聞いてもらう関係を築くかを考え、行動に移してきた。「結局は、人と人、積極的に連絡を取る、面倒くさがらずに自分から動く。その場に応じていろんな手段を使います。患者さんのために、みんなが協力して、ひとつの目標に向かって行くためには、コミュニケーションを取る、コミュニケーションが大事なんです」。意見を通そうと薬学的な裏付けをもってアプローチすることだけでは、押し付けになりかねない。きちんと礼を尽くして、丁寧な対応をしないと、うまくいくもの



オンラインのコミュニケーションツール(MCS)を導入したことで、多職種間の連携が革新的に効率化した。

### 在宅医療で活躍する栄養士が 所属する薬局

現在、プラス薬局には管理栄養士も在籍している。大学で微生物学を専門にする小黒氏の父が食品衛生を教えていたこともあり、栄養士にはとりわけ強い思い入れがある。食べることが生きること。栄養学とは医療の根幹にあるものだ。栄養相談が「おまけ」のような扱いで取り込まれることが少なくない薬局で、もっと栄養士の専門性を発揮できる土壌があれば、改善されることがあるのではないか。その可能性を信じて、栄養相談を有料にし、お金をいただくことを徹底した。その代わり、利用者と契約を交わして、かかりつけの医師がいれば報告も出すようにした。患者自身がそのアドバイスを理解し、無理なく続けられるよう、生活の中に溶け込んだ指導を心がける。担当の理学療法士やケアマネ等の他の職種とも一緒に向く「買い物同行」も、気づきや発見が落ちていた。成果が現れるようになり、訪問にもその取り組みが活かされはじめた。現在では、指名がかかるほど引手数多の状態だという。

### 薬剤師の可能性に 挑戦し続ける

が本来担うべき役割の一つでもある。プラス薬局が2014年から定期的に開催してきた「健康プラス教室」では管理栄養師も、地域住民との交流の機会となっている。

プラス薬局がドライブスルーで薬を渡せる仕組みを取り入れたのは、非接触という利点や効率化のためだけではなく、ドライブスルーなら、車を降りて薬局に来るのが困難な患者が顔を見せにくれるかもしれない。「患者の顔を見る」ための作戦だ。漢方コーナーを設けて、サロンのような空間のなかで、じっくりと話を聞ける場所にした。薬剤師としての「究極の処方」である漢方が浸透することは、予防医療を推進することにつながる。そんな思いからだ。

「ここは私たちの集大成」と開口一番に紹

### 在宅医療の現場でプラス薬局が実践する 「訪問診療前薬剤師ラウンド(事前ラウンド)」

薬剤師による薬学的介入を医師の訪問診療時に伝えられるようにするための取り組みとして、プラス薬局では高齢者施設において「事前ラウンド」を取り入れています。「必要な情報を必要な時に届ける」ために、プラス薬局ではじめた取り組みについて紹介します。

#### 訪問診療日の少し前

- あらかじめ医師の訪問診療日を確認し、薬剤師単独で患者や施設を訪問
- 服薬状況や患者、看護師のインタビューより薬物療法を評価
- バイタル状況を含む一枚の報告書(A)にまとめる

#### 訪問診療日当日

訪問診療当日朝に医師宛に担当患者全員の情報(A)をメールやFaxで送信し報告する

医師は事前ラウンドの報告書を基に、最新の状態を把握しながら診察をする

- 医師は前回訪問のアウトカムを把握した上で診療できるので、効率よく診察ができる
- 最新の情報が共有されているため患者は安心して診察を受けられる
- 薬剤師の視点が診療に組み込まれチーム連携の質が上がることで、精度の高い医療につながる

介してくれた店内には、光がたっぷり差し込んでいた。薬剤師としての可能性を信じる一心で前に突き進んできた小黒氏の、薬剤師としての姿勢を投影したような、自由な空間が広がっていた。「薬剤師の仕事って、楽しいんですよ。これまでの苦労さえも終始笑顔でお話くださる小黒氏。その姿からは、薬剤師の可能性を信じ、取り組んできたことは間違いでなかったという自信と誇りが伝わってくる。調剤に対して、薬剤師自身ももっと興味を持って欲しい。小黒氏は、薬学の知

識を生かしながら、患者さんの「非保険」の部分、未病の部分にどう取り組めるかを考えていきたいという。「高度な薬を町の薬局で扱えるようになったのは、調剤薬局になったから。それは薬局にとって大きな進歩なんです。医療機関のなかで、薬局だけが予約も要らない、処方箋も保険証もなく医療相談ができる場所です。地域の人の相談を受けながら、必要に応じて、受診勧奨をし、医療機関へ適切につながる。薬局の役割を果たしたい」と、薬剤師の未来を見据える。